

平成30年8月30日(木)

秋空

暑い夏ももう既に過ぎようとしていることが空の絹雲から分かります。更に鳴く蟬の声が、虫の音に変わったことから秋の気配を感じております。

徒然草155段に、

「春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気をもよほし、夏よりすでに秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる気、下にまうけたるゆゑに、待ちとるついでにはなはだ速し。」

(口語訳)

春が終わってから夏になり、夏が終わってから秋が来るのではない。春はそのまますぐに夏の気配を誘い、夏のころからもう秋はやってきており、秋はそのまま寒くなり、十月は小春の天気では、冬だというのに、草も青くなり梅のつぼみもふくらむ。木の葉が落ちるのも、まず葉が落ちてから芽ぐむのではなく、葉の下から芽ばえるのでそれに耐えられなくなって葉が落ちるのである。次のものを迎える気を、下に用意してあるから待ち受ける順序はとてはやいのである。

と述べています。

しかし、その続きがあります。

「徒然草」

「生・老・病・死の移り来る事、またこれに過ぎたり。四季は、なほ、定まれるついであり。死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず。かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、まつこと、しかも急ならざるに、覚えずして来る。沖の干潟遥かなれども、磯より潮の満つるがごとし。」

(口語訳)

誕生・老化・病気・死亡が移りくることは、四季の変化以上にはやい。四季の変化はやはり順序がある。死がやってくることは順序がない。死は前から来るとはかぎらないで、あらかじめ後ろに迫っているのである。人はすべて死がやって来ることを知っているのだが、すぐには来ないと思っているので、死は思いかけずにやって来ることになる。沖の干潟は遥か遠くまで続いているのに、

横の磯から潮が満ちてきて一面水になるのと同じである。

兼好法師が、述べているこの真実は、いやが応にも避けられない私たちの命の真実でもあるのです。

それでも私は思います。生徒諸君は、私よりずっと後まで生きて下さい。まだまだたくさんしなければならぬことに人生は満ちております。読まなければならぬ本は星の数ほどあり、行かなければならぬ土地は、遠くに広がっており、会うはずの人々が手を広げて向こうでまっているのです。

